

ヤンゴン素描 38

パヤー・ラーン 華僑の町と、印僑の町

山形洋一

中央駅のすぐ西にあるパヤー・ラーン駅は、「門前通り駅」としては寂れているが、南にある商業地区への通勤客でにぎわっている。南西は華僑の店、南東は印僑の店がそれぞれ並ぶ、国際色豊かな町だ・

尖塔の立つ英国国教会のホーリー・トリニティー教会脇の陸橋から、階段を下りたところに、駅の玄関がある。入口こそ目立たないが、降りてみるとプラットフォームは広く、天秤でさまざまな食いが持ちこまれている。もっとも多いのは「手揉み油そば」（仮称）。揚げ（厚めの薄揚げ）の口を開いてきざみキャベツを挟みこんだ「稲荷キャベツ」（仮称）も人気がある。

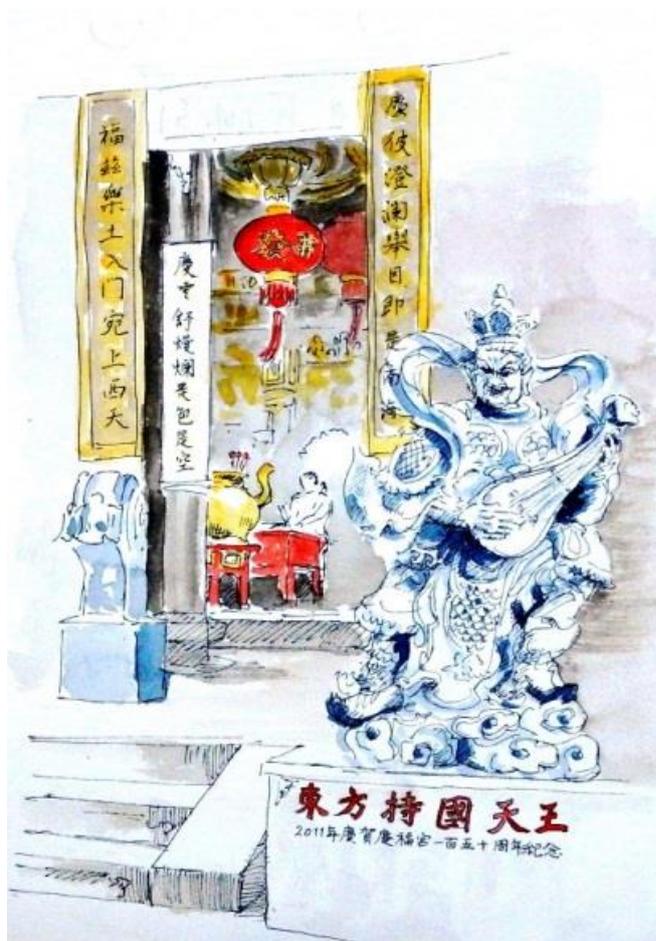


駅名の「パヤー」は「仏陀」、転じて「仏寺」の意で、「ラーン」は通り。つまり「お寺通り」駅だが、ヤンゴンで「お寺」といえば金色大塔シュエダゴンのこと。生前にブッダから与えられた毛髪が埋められていると伝えられ、塔はブッダの体そのものと見なされる。駅名の元に成ったシュエダゴン大塔への南参道が、駅の西を南北に走っている。

だが今では、シュエダゴンへの表参道は東に移り、かつて路面電車が走っていたという南参道は寂れている。駅から北へ約2キロメートル、だらだらと上り坂の両脇には、軍関連施設や官舎などが点在し、黒塗り木造建築は江戸の武家屋敷を連想させる。塔の近くになってようやく、参詣客を休ませる会館

（ダマヨン）が出てくる。ビルマ王朝最後の王妃スパヤラーSuphayalat（1859年－1925年）の廟や、国連事務総長ウ・タン氏（1909年 - 1974年、日本ではウタントと呼ばれていた）の廟もあるが、訪れる観光客は少ない。

駅の北が寂しい「武家屋敷」であるのに対して、駅の南は賑やかな商業都市だ。乗降客の多くはホーム西端の階段を使わず、ホームの東端にある抜け穴のような門をくぐり、ボージョー・マーケット（旧称スコット・マーケット）に並ぶ外国人観光客向けの貴石、宝石、服飾、などの店舗には目もくれず、南の商業地区へ通っている。



パヤー・ラーンのもと「チャイナ・ストリート」と呼ばれ、ここから西には漢字の看板が多い。まずパヤー・ラーンに沿って「緬甸華僑商業会館」があり、すぐ西のラタ通り沿いには広東系の観音古廟（光緒13年建立）とイスラム系の「仰光雲南会館」が、Sint Oh Dan St.（18番街と19番街に挟まれた通り）には「緬甸広東商工会議所」と福建系の「慶福宮」がある。これらの通りの南橋はJetty（棧橋）となって川に突き出ていたが、今ではコンクリートの大埠頭にまとめられている。

官営「スコット・マーケット」として出発したボージョー・マーケットに対して、その南にあるテインジー（Thein Gyi）マーケットは私設市場で、スーラテ

ィ・バザールと呼ばれていた。インド西部グジャラート州の港町スーラトの出身者が作っもので、た今でも生鮮食品など庶民の台所としてにぎわっている。グジャラート出身の商人は「インドのユダヤ人」と呼ばれ、東アフリカ、南部アフリカ、フィジーなどで活躍している。市場の旧称は近くのモスク（Surat Bazar Jamay Mosque）に残されているが、それとは別に Surati Mosque もあり、その近くには宝石商が集まっている。

ボージョー・マーケットの東縁から南へ延びるシュエボンター（Shwe Bon Thar）の大通りは、かつて「ムガル通り」Mogul Street と呼ばれ、そこから東には今でもインド系の商店で占められている。通りごとに扱う商品が異なり、たとえば26番街は船舶関連、スーレ・パゴダ手前の31番街には印刷、出版、文房具関係の店が集まっている。（了）